Japanese Association of Educational Psychology

に関する調査から IQ 60 以上の例での社会的自立もしくは結婚の可能性を示唆したものである．これを特殊教育の効果とみなすべきか否かについて伊藤（神戸大）の質問があったが，神経科外来での臨床経験からは特殊教育の成果と考えざるをえないことの堀の意見が述べられた．安村（709）の報告は，周囲の拒否的態度から生じた情緒障害に描画療法を適用する試案である．行動に活動性を増すことを示した．（伊沢秀而・小出 進）

b 精 薄 児 II

710 精神薄弱幼児の教育と訓練の効果に関する研究（序報）
○田畑 洋子（千里総合児童研究所）
高 木 俊一郎（大阪学芸大学）
松坂 禎子（千里総合児童研究所）
川崎 昭子（ 〃 ）
田 畑 治（京 都 大 学）

711 精神薄弱児の早期教育に関する研究
坂 元 龍 生（高 知 大 学）

712 精神発達遅滞幼児の行動診断に関する研究 —その I 問題と方法—
①津 守 真（お茶の水女子大学）
西山 恭子（日本総合愛育研究所）
②川島杜紀子（ 〃 ）
③水田 順子（ 〃 ）

713 —その 2 発達的検討— 〃

714 —その 3 問題行動をもつ事例の検討— 〃

715 精神薄弱児の感覚運動系の機序
1．感覚運動系の発達
○山 際 一 朗（東 京 大 学）
伊 沢 秀 而（日本女子大学）
毛 利 裕 子（ 〃 ）
○内 山 武 治（東 京 大 学）
藤 島 岳（東 洋 大 学）

716 2．不応性（refractoriness）の問題 〃

717 重症精薄児の常同的行動について（Ⅲ）
篠 崎 久 五（九 州 大 学）

この部屋の研究は，大きく分けて2つに大別される．第1のものは，710から714までのもので，教育の実践につながる研究である．第2のものは，715から717までのもので，実験調査のレベルの研究である．いずれも興味深い発表であったが，討論は各発表ごとに行われたので，発表に対する直接の質疑応答が多く，参会者の共通の関心にふれる基本問題の討論にはいいかけたところで，制限時間になってしまったのは残念であった．発表会場は大きな教室がほとんどいっぱいにうずまり，精神薄弱児研究に関する関心の高まりをうかがうことができた．

第1の問題は，精神発達のおくれた幼児の治療教育の実践的研究であるが，そのうち，最初の2つは，実践的指導の流れの中で，観察法により，幼児の行動の変化を計測的にとらえようとしたものである．710 田畑洋子，高木俊一郎らの研究は，大阪における千里綜合児童研究所の精神薄弱の幼児のグループ指導の研究である．治療教育を通しての幼児の行動の変化をとらえるために，観察を主とする4種のメジャーが作成されて，その信頼度などが検討されている．すなわち，① プログラムへの参加状況チェック用紙，② 保育目標達成度記録表，③ 遊戯行動観察記録用紙，④ 行動性格の傾向である．問題として残されたもののひとつに，これらのメジャーを用いて，治療教育の効果を測定するということが挙げられているが，この点にふれたものが，711 の坂本龍生による精神薄弱児の早期教育に関する研究である．この研究は，北九州市における精神薄弱児の養護幼稚園「いずみの園」の治療教育の実践に伴う研究である．ここでは，運動機能検査，知能検査等の諸検査および，ここで考案された観察記録法がメジャーとして用いられている．観察記録法は，基本的生活習慣調査，集団行動観察，遊戯行動観察，適応行動調査である．これによってみると，早期教育により，知能検査の結果自体には変化がみられないが，その質的な側面および，基本的生活習慣，適応行動には，治療な育効果と認められる変化がある．ただし，その変化のあらわれ方は，個人によって異り一様でない．

以上の2つが，治療教育の実践の場における観察にもどづいて特定の行動記録（評価）表を作成したものを主たる研究の道具としたのに対して，712～714 の3つは，治療教育場面において観察されたことそのものを研究対象として分析しようとしたものである．この3つの研究は，津守ほかによる，愛育研究所における精神発達のおくれた幼児のグループの治療教育の過程の現象分析であり，とくに各種のおくれの型の幼児が，同一場面におい

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

てどのように異った行動を示すかを分析しようとしたものである．そこで目指しているものは，行動を通しての診断である．この発表においては，とくに，描画，ままごと，およびリズム遊戯の3場面を標準場面とし，そこにおける行動の個人差を明らかにしようとした．方法としては，直接観察記録，およびビデオテープコーダー（V.T.R.）を使用し，比較的短時間の限られた場面の詳細な分析を試みた．標準場面といっても，標準検査のように特定の手続を固定するのではなく，むしろ，個人にあわせて指導の刺激もかわることを前提とし，治療教育をすすめながら診断するという考えをとった．ここで討論として問題とされたことは，各場面における行動の記述法を公共化し，単純化したものとならないかということであった．この点は今後の問題であり，なおいろいろのケースについて，各種の場面における行動の理解をつんでゆかなければ解決しないことである．また，昨年度も問題になったことであるが，治療教育ということをどのように考えるかということが問題にされたが，十分に討議する時間がなく残念であつた．

第2の問題のうち，715，716は，伊沢秀而，山際一朗，内山武治らによる感覚運動系に関する研究である．特殊学級児童に対して，光刺激に対する反応をみたものである．単純反応時間は，CAよりもMAに規定されるが，最大運動反応および追縦反応については，MA規定以外の要因が予想され，同一MAの正常児の構造とは質的に異なる作用機序のあることを予想させる．この研究についても二，三の討議がかわされ，とくに，重症精薄児群はとくに反応の逸脱が目立つことに関して討議された．また，光刺激は，リズムを伴った刺激提示と考えられようが，精薄児のリズムに対する反応はどのように考えたらよいのであろうか．

717 篠崎久五の重症精薄児の常同的行動についての研究は，収容施設における，タイムサンプリングによるチェックリスト法の研究である．実験条件として，年長精薄児が被験精薄児の遊び相手になる場面を作ったとき，常同的行動は減少している．また自閉症群を構成してみると，一般に自閉症群は常同的行動が高いが，実験条件下では，その常同的行動が減少することが認められた．この点についても，討論が展開するとおもしろかったのであろうが，参会者の関心がこの問題に対する以前に制限時間となり，十分に討議されなかったのは残念であった．

（津守　真・坂本龍生）

c 精　薄　児 III

718 精神薄弱研究の問題点
　　○大　西　憲　明（大阪市立大学）
　　田川　元康（大阪府立堺養護学校）

719 精神薄弱児教育に関する教育心理学的研究（Ⅳ）
—X.S. 両学級卒業生の追跡—
その 1　問題と方法
　　①富　安　芳　和（名古屋大学）
　　②荻　野　　惺（　〃　）
　　③村　上　英　治（　〃　）
　　泰　　安　雄（日本福祉大学）
　　江　見　佳　俊（愛知学院大学）

720 その 2　結果とその考察　〃

721 その 3　研究の総括　〃

722 精神薄弱児の臨床教育心理学的研究（第4報）
その 1　研究意図と研究経過
　　①田川　元康（大阪府立堺養護学校）
　　②山中　栄子（大阪市立済美小学校）
　　③今道宗孝（大阪府立高槻養護学校）
　　④伊　藤　隆　二（神　戸　大　学）

723 その 2　仮説の検討（1）　〃

724 その 3　仮説の検討（2）　〃

725 その 4　まとめと今後の見通し　〃

この教室では，現代の精神薄弱研究での研究方法上の問題点を概括的に論じた大西憲明と，精神薄弱児の教育実践を通して，その人格形成を究明しようとした名古屋大学グループと神戸大学グループの3つの発表をめぐって討議された．まず，大西の発表に対しては京大の佐藤幸治から，米国や英国だけでなく，東洋諸国の精神薄弱研究の現状についても教示してほしい．例えば中国では漢方医学を精神薄弱の治療に応用したという研究はないか，と質問が出された．これに対し大西は東洋での研究については全く調べていない旨の回答があった．なお，大西はとくにわが国においては，精神薄弱研究について，総合的研究体制が整っていないことと，研究用語ないしは概念があいまいで，研究者間に共通した意味内容が確立されていないことの2点を問題点としてあげてい

NII-Electronic Library Service